

Saki Nagayama

Harry Mulisch *De aanslag* blz. 7 t/m 21

ハリー・ムリシュ

『襲撃』（236ページ）試訳 p 7～21

すでにあらゆる場所が朝だったが、ここは夜だった。

いや、夜以上のものだった。

ガイウス・プリニウス・カエキリウス・セクンドゥス（小プリニウス）

『プリニウス書簡集』第六巻、十六

プロローグ

はるか昔、第二次世界大戦当時にアントン・ステーンワイクという名の少年が、両親と兄と共にハーレム市のはずれに住んでいた。百メートルは運河沿いで、それからゆるやかなカーブでふつうの通りとなる堤防に、四軒の家がさほど距離をおかずに立っていた。どの家も庭に囲まれ、小さなバルコニー、出窓、急勾配の屋根がつき、小さいながらも邸宅の趣をかもしだしていた。上階はどの部屋も壁が斜めになっていた。一九三〇年代にほとんど改築されなかったため、壁のペンキは剥げ、荒廃した印象だった。どの家にも心配事がなかった時代の実直で市民的な名前がついていた。

ウェルヘレイヘン バウテンルスト ノーイトヘダフト ルステンブルフ
(よい場所にある) (外の安らぎ) (考えたことのない) (安らぎの橋)

アントンは左から二番目のかやぶき屋根の家に住んでいた。戦争勃発の直前に父親が借りたときからすでに〈バウテンルスト〉という名前だった（〈バウテン〉は〈外〉、〈ルスト〉は〈安らぎ〉の意）。自分で名づけるなら、父は〈エレウテリア（自由）〉とでもしただろう。それも古代ギリシャ文字で。大惨事が起こる前にもアントンは〈バウテンルスト〉という名前を〈外にいることの安らぎ〉ではなく、なにかが〈安らぎではない〉というふうにとらえていた。〈バウテンヘウォーン〉（〈ヘウォーン〉は〈ふつう〉の意）という言葉が〈外にいることのふつうさ〉ではなく、むしろその逆に〈ふつうの外〉すなわち〈法外な〉という意味であるように。

〈ウェルヘレイヘン〉にはベウマー夫妻が住んでいた。退職した病気がちの業務代理人とその妻だ。アントンはときどき寄って、彼らが〈カーキエ〉と呼んでいた固いビスケット

と紅茶をごちそうになった（少なくとも、まだ紅茶とビスケットがあるうちは）。事件の歴史であるこの物語のはじまる前のことだ。ときどき、ベウマー氏が『三銃士』の中の一章を朗読してくれた。反対側の〈ノーイトヘダフト〉に住んでいたコルテウェフ氏は外国船の航海士で、戦争により働けなくなっていた。妻が亡くなり、看護師をしていた娘のカーリンが家に戻ってきていた。アントンは裏庭の垣根の隙間からこちらの家に行くこともあった。カーリンはいつもやさしかったが、父親の方がかまってくれることはなかった。堤防の住人たちにはほとんど交流がなかったが、最も孤立していたのは戦争の始まりに〈ルステンブルフ〉に引っ越してきたアールツ夫妻だった。アールツ氏は保険会社で働いていたようだが、それも定かではなかった。

四軒の家は新しい地区のさきがけとして建てられたが、それ以上、家が増えることはなかった。横と裏手は雑草や灌木、それほど若くはない木々の立つ埋立地があり、アントンはその〈土地〉で過ごすことが多かった。少し離れたところに住む子どもたちもそこに遊びにきた。時折、夕暮れ時に母親が家に入るよう、呼ぶのを忘れていると、香るような静けさがたちこめた。その静けさは彼を得体の知れない期待で満たした。なにか将来に関する期待だ。大きくなったら起こるはずの物事。大地も木々の葉も身動きひとつしない。二羽のスズメが突然、鳴き声をあげて歩き回る。人生は、周りから自分が忘れ去られた、神秘的で無限な、こんな夜のようなものだろう。アントンはそう思っていた。

家の前の道路はレンガ敷きで、ヘリンボーン模様になっていた。歩道はなく、道路と草の生えた路傍が隣接し、ゆるやかに引き船道（運河の岸に沿って走る道）へと下降していたので、心地よく寝そべることができた。幅の広い運河——ゆるやかなカーブだけがかつては川であったことを示していた——の対岸には数軒、労働者用の小さな住宅と小さな農場があり、その向こうは地平線まで牧草地がつづいていた。そのさらに向こうがアムステルダムだった。戦争が始まる前には夜になると街の反射光が見えたものだと父親が言っていた。アントンは何度かアムステルダムに行ったことがあった。アルティス動物園と国立美術館、そして一晩泊めてもらった叔父の家に。運河の右手のカーブのところには常に静止したままの風車があった。

時折、そこに寝そべり遠くを見ているとき、脚を引っ込めなければならないことがあった。何世紀も前からやって来たような風貌の男が、草を踏みつぶした引き船道をこちらに向かって歩いてくるからだ。男は先端が荷船の船首に結わえられた何メートルもある棒に垂直に覆いかぶさるようにして、ゆっくり歩きながら船を押し去っていった。舵はたいてい髪を団子に結ったエプロン姿の妻が取っていて、子どもは甲板で遊んでいた。棒は、別の方法で使われることもあった。その際には男も乗船し、水中の棒を後ろ手に引きずって荷船の横側を前方に歩いていく。前部上甲板に着いたら水底にその棒を斜めに突き刺して握りしめ、船を前に押し出すように後ろに歩いて戻っていくのだ。アントンはそれが一番美しいと思っていた。船を前に押し出すために後ろに歩き、同時に同じ場所にいる——いつも夢中でその様子を見ていた。とても奇妙な現象だったが、誰かに話すことはなかった。そ

それは彼だけの秘密だったのだ。後に自分の子どもたちにその話をしたときによく、自分がなんという時代に生きていたのかを認識した。もはやそんな様子を見るのはアフリカやアジアの映画の中だけだった。

一日に数回、小型帆船が通った。こげ茶色の帆の巨大な船が静かにカーブを曲がって現れ、目に見えない風に押されて次のカーブで消えていった。発動機船はまたちがっていた。船体を上下に揺らしつつ船首で水面を V 字に割り、その波紋は両岸に届くまで広がる。船はすでにずっと前方に進んでいるが、岸にたどり着いた波は突然、上下に動きはじめ、それから跳ね返り逆の V、すなわち Λ を成す。ラムダは次第に閉じていくが、今度は元の V と影響を与えあい、ひずんで反対の岸に届き、また跳ね返り、運河の横幅いっぱい複雑な波の編み模様が広がるのだ。最終的に水面が静まり平たくなるまで、まだ何分間もあらゆる変化が起きた。

アントンは毎回、正確にはどんなふうに行っているのかを突き止めようとしたが、その度にさまざまな要素が一つのパターンを成し、どうしても全体を把握することができなかった。

最初のエピソード

一九四五年

1

夜七時半ごろのことだった。ストーブはわずかな薪で数時間、静かに燃えたあと、また冷えきってしまった。アントンは裏側の部屋で両親とペーターとテーブルを囲んでいた。皿の上に植木鉢の大きさの亜鉛の筒が載っていた。筒の上から先端が Y の字のように分かれた細いパイプが出ていて、両穴から二本の鋭い、目を眩ますような白い炎が互いを結ぶように出ている。器具の放つ生命力のない光が部屋を照らし、干された洗濯物（どの服も何度も繕われていた）、台所用品、アイロンをかけていないシャツの山、干草を詰めて食べ物を温かく保つ箱が、濃い影の中に見えた。父親の書齋からもってきた二種類の本も見えた。食器棚の上の一行は読むための本で、床に詰められた三文小説はなにか料理をするものがあるときに非常用ストーブを点けるためのものだった。新聞は数ヶ月前から休刊になっていた。寝る以外の生活はすべて、かつてのダイニングルームで営まれていた。引き戸の向こうの通り側にある居間は、一冬中使われていなかった。少しでも寒さをしのげるよう、居間のカーテンは日中も閉められていたので、通りからは無人のように見えた。

一九四五年一月のことだった。ヨーロッパのほぼ全域が解放され、人々は祝い、食べ、飲み、性交し、徐々に戦争を忘れはじめていた。だがハーレムは次第に、まだ石炭があっ

たときにストーブから出てきた灰色の燃え殻のようになっていった。母親は濃紺のセーターをテーブルの上に置いていた。半分はすでに姿を消していた。左手にしだいに大きくなる毛糸玉をもち、そこに右手でセーターの毛糸を巻いていった。アントンは左右に動く毛糸を見ていた。毛糸の動きによってセーターはこの世から消えていく。袖を平たく広げた形は、まるでなにかを妨げたようとするがボールに変わってしまう人のようだった。母親が自分にはほほ笑みかけているのに気づくと、また本に視線を戻した。母の金髪は三つ編みを巻き上げて、二つのアンモン角のように耳にかぶさっていた。時折手を休め、冷えた代用茶を一口飲んだ。裏庭の雪を溶かして淹れたものだ。水道は止められていなかったが、いまは凍結していた。母は奥歯に虫歯があったが、治療できないので、かつて祖母がしていたように台所に残っていたクローブを詰めて痛みを凌いでいた。母が背を伸ばして座っているのとは対照的に、父はその向かいで背中を丸めて本を読んでいた。禿げた頭のとてつぺんを囲んで、白髪の間ぎらな濃い髪が蹄鉄のように残っていた。時々息を吹きかける両手は大きくて粗野で、地方裁判所の書記ではなく労働者のものに見えた。

アントンは兄の着れなくなった服、ペーターも父親の大きすぎる黒いスーツを着ていた。ペーターは十七歳で、食糧が乏しくなったころ突然背が伸びはじめたので、まるでモミ材の板でできているようにやせ細っていた。彼は宿題をしていた。一斉検挙で捕まえられ、ドイツで強制労働をさせられる年齢になったため、ここ二ヶ月ほど外出を控えていた。二度落第したので、まだギムナジウム（ラテン語を学ぶ高レベルの六年生高校）の四年生で、ますます遅れを取らないように父親から宿題付きの授業を受けていた。兄弟は両親同様、互いに似ていなかった。互いにそっくりの夫婦もあり、その場合はおそらく妻が夫の母親に似ており、夫が妻の父親に似ているのだろう（おそらくもっと複雑にちがいないが）。だがステーンワイク家は二つの明らかな部分から成っていた。ペーターは母親の金髪と青い目を、アントンは父親の濃い色の髪、茶色い目と薄茶色の肌を受け継いでいた。目の周りの肌はさらに少し濃い色だった。アントンもいまは通学していなかった。リセウム（中レベルの高校）の一年生だったが、石炭不足からクリスマス休暇が霜の溶ける時期までつづくことになった。

アントンは腹をすかせていたが、明日の朝にならないとサトウキビのシロップを塗ったべとべとの、くすんだ色の食パンが食べられないとわかっていた。午後、彼は幼稚園の給食所に一時間並んだ。暗くなったころにようやく背中に銃を背負った警官の護衛で、釜をのせた荷車がやって来た。配給券に穴が開けられたあと、持参した鍋にお玉四杯分の水っぽいスープを入れてもらえた。家までの道すがら、温かくかすかに酸っぱいスープはほとんど口にできなかった。幸いもうすぐ寝る時間だった。夢の中ではいつでも平和だった。

皆黙ったままで、外からもなにも聞こえてこなかった。いつでも戦争だったし、これからもずっとそうだろう。ラジオも電話も、なにもなかった。炎がパチパチ音をたて、たまに小さくはじける音がした。マフラーを巻き、母親が古い買い物袋で作った足を温める袋に足を入れ、アントンは〈自然と技術〉誌の記事を読んでいた。誕生日プレゼントにもら

った一九三八年度版の古雑誌だ。〈子孫への手紙〉という記事で、腕まくりした恰幅のよいアメリカ人研究者たちが、頭上にぶらさがる魚雷の形をした大きなガラスの容器を見つめていた。これから地下十五メートルに埋められるという瞬間だ。子孫が開けるのは五千年後で、ニューヨークの万国博覧会当時の文明を知るという趣旨だった。頑丈なキュパロイ製のタイムカプセルの中には不燃性のガラスでできた円筒が入っていて、何百もの物体が納められている。科学や技術、芸術の現状を千万語、千の画像で示したマイクロアーカイブ、新聞、カタログ、有名な小説、聖書、三百の言語による主禱文、偉人たちのメッセージ、一九三七年の日本軍による広東爆撃の悲惨な映像、種子、コンセント、計算尺、その他あらゆるもの——一九三八年の秋に流行った女性の帽子に至るまで。世界のすべての重要な図書館と博物館に、コンクリートで封じた〈永遠の円筒〉の眠る場所を記した証書が送られた。七十世紀に見つかることを祈って。だがなぜ六九三八年まで待たねばならないのか、とアントンは疑問に思った。もっと早くに興味深いものになるのではないか。

「パパ、五千年前ってどのくらい前なの？」

「ちょうど五千年前だよ」ステーンワイクは本から顔を上げずに答えた。

「もちろんそうだけど、そのときすでに……つまりさ……」

「はっきり言いなさい」

「だから、そのときの人たちにもいまのような……」

「文明をもっていたの？」と母が助け船を出した。

「うん」

「なぜ君は彼に自分で言わせないんだ？」ステーンワイクはメガネごしに妻を見つめ、それからアントンにむかって言った。「まだエジプトやメソポタミアで始まったばかりだったよ。なんでそんなことを聞くのかね？」

「ここに書いてあるんだ。あと……」

「できた！」ペーターが辞書と文法の教科書から顔を上げてノートを父親の方に押しやり、アントンの隣りに立った。「なに読んでるんだ？」

「なんでもない」アントンは雑誌に覆いかぶさるようにして隠した。

「見せておあげなさい、トニー」母がアントンを起こし上げて言った。

「ぼくだっていつも見せてもらえないのに」

「うそ臭いぞ、アントン・ミュッセルトめが」とペーターが言うと、アントンは鼻をつまんで歌いだした。

「災いとしてぼくは生まれ、
災いとして死んでいく……」

「うるさい！」ステーンワイクは叫び、机を平手で叩いた。

NSB（オランダ国家社会主義運動）の最高責任者、アントン・ミュッセルトと同名であるこ

とで、アントンはよくからかわれた。戦時中、ファシストたちは息子をアントン、あるいはアドルフ、時にはアントン＝アドルフとさえ名づけることがあった。上にナチスのシンボルマーク、ヴォルフス・アンゲルやハーケンクロイツがついた誇らしげな誕生広告を見ればわかった。のちにそういう名前の人や、〈トン〉とか〈ドルフ〉と呼ばれる人に出会うと、戦中生まれなのではないかと思った。そうであれば、その人の両親がナチスを支持していた——しかも熱烈に——のはまちがいない。戦後十年から十五年経つと、アントンという名はまた受け容れられるようになった。ミュッセルトが取るに足らない人物であったことの証だ。アドルフ名の方は二度と名誉回復しなかった。またアドルフという名が付けられるようになってようやく第二次世界大戦が過去となるだろう。だがそれには第三次世界大戦が必要だから、アドルフ名は永遠に葬られた、ということだ。アントンがペーターに対抗して歌った歌も、今では説明なしには理解できなくなった。まだ人々がラジオをもっていたとき、ペーター・ペッフ（災いのペーター）の名でラジオで活躍していたお笑い芸人の鼻声の歌の真似だったのだ。だが今となっては理解できないことは他にもたくさんある。とりわけアントン自身にとって。

「ここに座りなさい」ステーンワイクはノートを手に取り、ペーターを横に座らせると、厳粛な声で訳を読み上げた。「『雨と雪解け水によって増水した川が山脈から溪谷に激しく流れ、泉から溢れて窪んだ川底に合流するときのように、そして遠くの山から羊飼いがその轟音を聞くように、兵士たちの叫び声と乱闘の音は聞こえた。』……すばらしいじゃないか」ステーンワイクは後ろにもたれ、メガネをはずしながら言った。

「ほんとにすばらしいよ」とペーターは言った。「こんなややこしい文章を一時間半もかけて訳したら、よけいにね」

「これならたとえ一日がかりでも訳す価値があるよ。作者が自然をどんなに生き生き描いているか、見てごらん。間接的に、比較として。気づいたかい？ これを読んで記憶に残るのは、闘う兵士たちではなく自然の姿だ。それは今も残っている。戦は消え失せても川はまだ残っていて、今でもこの音を聴けるんだ。そうしたら、君がこの羊飼いだ。まるで作者がこう言おうとしているかのようだ。存在のすべては他の物語の直喩であり、その物語を知ることが肝心なのだ、と」

「だからそれが戦争なんじゃないか」ペーターが言った。

ステーンワイクは聞こえなかったふりをした。

「完璧だよ、よくやった。小さなまちがい一つだけある。合流するのは〈川たち〉ではなく〈二つの川〉だ」

「どこに書いてあるの？」

「ここだよ。〈シンバレトン〉というのは二倍のことだ。二つの物が一つになることだよ。それでなきゃ二つの軍隊と合わないからね。これはホメーロス独特の形式なんだ。〈シンボル〉もそうだ。〈シンバロ〉に由来し、〈集める〉〈出会う〉という意味だ。では〈シンボロン〉はなんだか知ってるか？」

「知らない」ペーターの口調からは、知りたくもないのが明らかだった。

「なんなの？ パパ」とアントンが訊いた。

「半分に割った石のことだよ。たとえばパパがどこかの町に泊まるとするだろう？ 宿の主は今度、おまえのことも泊めてもらえないか、頼むんだ。主はどうやっておまえがパパの子どもにまちがないとわかるのか？ そういうときはシンボロンをつくるんだ。主に片割れを渡しておいて、家にもどったパパがおまえにもう半分を渡すんだ。おまえが宿に着いたら、二つがぴったり合わさるというわけだ」

「それ、いいね！」とアントンは言った。「今度つくってみるよ」

ペーターが呻いて顔をそむけた。

「なんでそんなことばかり知らなきゃならないんだよ！」

「知らなきゃならないんじゃない」ステーンワイクがメガネ越しにペーターを見つめて言った。「今にわかるよ、これが君の人生をどれほど豊かにするものかが」

ペーターは本を閉じて積み重ね、変な声で言った。

「人間を見て、笑わぬものがあるだろうか？」

「それがどう関係するの？ ペーター」母親はそう訊ね、クローブを歯に押しつけた。

「なにも関係しないよ」

「どうせそんなことだろう」と言ったステーンワイクはラテン語で付け足した。「スト・プエリ・プエリ・プエリ・プエリリア・トラクタント（子供は子供、子供らしいことをするものだ）」

ペーターは姿を消し、ステーンワイク夫人は毛糸玉を編み物かごにしまった。

「さあ、寝る前にゲームをしましょう」

「もう寝るの？」ペーターが言った。

「カーバイドを節約しなきゃならないの。あと二日分しかないのよ」

整理ダンスの引き出しから、ステーンワイク夫人はルドゲームの箱を出し、卓上ランプを押しやってゲーム盤を広げた。

「緑がいい」アントンが言った。

ペーターはアントンを見て、呆れた顔で頭を指さした。

「緑だと早く上がれると思ってるのか？」

「うん」

「お手並み拝見といくか」

ステーンワイクが本を開いたまま横に置くと、それからサイコロが転がる音と、厚紙の上を駒が進む音しか聞こえなくなった。時刻はほぼ八時、夜間外出禁止時間だ。外はあまりにも静かで、月にいるかと思うほどだった。

(1章終わり)